

水曜通信19

東北学院宗教センター編

2022年
7月

LIFE

LIGHT

LOVE

敵を愛せよ！

ようやくコロナ感染症が収束に向かいつつあるようです。授業も礼拝も徐々に元に戻ると期待されます。

しかし時代が変わりました。コロナが終わっても、常に「死」を念頭に置く生活となるでしょう。しかしロシア・ウクライナ問題は相変わらずイデオロギーの対立を見せつけ、キリスト教国であるのに、「敵を愛せよ」（マタイ5：44）はどこに行ったのでしょうか？

愛と寛容は、自らを完全としないことに始まるとマハトマ・ガンジーは書いています（『獄中からの手紙』）。それは「信じます。しかし信仰をお与えください」との悪霊にとりつかれた父親の祈りです（マルコ9：24）。信仰の確信に満ちたマルチン・ルターも「主人であると同時に奴隷であれ」と書いています（『キリスト者の自由』）。「道を伝えて、己を伝えず」とは幕末以来の聖公会の宣教師ウィリアムズの伝道方針でした。

神さまの前で私たちは被造物であり無であること、それが知恵の始まり（箴言1：7）です。学院での日々の礼拝はその確認です。わが学院の建学の精神こそ、生活と学問を支えているのです。



三校祖の肖像画が、毎年の創立記念礼拝の際に、ラーハウザー記念東北学院礼拝堂の奥の正面のステンドグラスの手前に置かれます。画家は布施信太郎（1899-1965）。学院中学部に在学していました。解説は4ページ。

理事長特別補佐〈宗教センター担当〉 鐸木 道剛

次回：第54回水曜公開礼拝（公開オンライン礼拝）
7月20日配信予定

学校法人東北学院ホームページをご覧ください。

【第1部 礼拝】

説教：鐸木 道剛（理事長特別補佐〈宗教センター担当〉）
奏楽：菅原 淑子（礼拝オルガニスト）

【第2部 音楽による賛美】

演奏：菅原 淑子



第53回 水曜公開礼拝報告（説教：大門 耕平、奏楽：椎名 雄一郎）

2022年6月22日（水） 公開オンライン礼拝

讃美歌：452番「ただしくきよくあらまし」
聖書：テサロニケの信徒への手紙ー5章16-18節
讃美歌：453番「きけやあいのことばを」
説教：「喜び、祈り、感謝を携えて」
頌栄：542番「よをこそりて」



【説教要旨】

キリスト教伝道者であったパウロの執筆した手紙には、「感謝」という言葉が多く用いられます。聖書において、「感謝」は、私たちへの神の慈しみや神の愛に対する応答を意味します。すなわち、生かされていること、神との関係を信頼することの応答表現が感謝であるということです。パウロが述べる「感謝」、その思いの根底には、神からの恵み、イエスからの愛が先行することの確信があります。神からの恵みが先行することを知るとき、本日の言葉は、励ましの言葉になります。神への愛に応答するものとして、「喜び」、「祈り」、「感謝」を携えていくものでありたいと思います。（文学部講師・大学宗教主任 大門 耕平）

前奏：D.ブクステフーデ作曲《来ませ、聖霊、主なる神》BuxWV199
後奏：J.S.バッハ作曲 幻想曲《来ませ、聖霊、主なる神》BWV651a

前奏、後奏とも、ドイツの教会歌（賛美歌）《来ませ、聖霊、主なる神》に基づく作品です。《来ませ、聖霊、主なる神》はペンテコステ（聖霊降臨節）の代表的な歌で、中世のグレゴリオ聖歌をルターがドイツ語に翻訳して、教会歌として歌われるようになりました。前奏はリュウベック聖マリア教会オルガニストで、バッハに多大な影響を与えたD.ブクステフーデ、後奏はJ. S. バッハによる作品です。

（文学部教授・大学宗教主任 椎名 雄一郎）



礼拝後、音楽による賛美（オルガン：椎名 雄一郎）

J.ブラームス『11のコーラル前奏曲』遺作 op.122より
J.Brahms from "Elf Choralvorspiele Op. posth. 122"

1. わがイエス、われを導きたまえ Mein Jesu, der du mich
2. 心から愛するイエス Herzliebster Jesu
3. おおこの世、私は去らねばならない O Welt, ich muss dich lassen
4. わが心の切なる喜び Herzlich tut mich erfreuen
5. おお愛する魂よ、汝を飾れ Schmücke dich, o liebe Seele
6. おお、いかに喜びに満ちたるか汝ら信仰深き者 O wie selig seid ihr doch
7. おお神よ、汝慈愛深き神よ O Gott, du frommer Gott
8. わが心の切なる願い Herzlich tut mich verlangen
9. わが心の切なる願い Herzlich tut mich verlangen



ヨハネス・ブラームス（1833-1897）は19世紀ドイツを代表する作曲家で、彼の最後の作品が『11のコーラル前奏曲集』といわれています。親しい友人であったクララ・シューマン（1819-96）が亡くなった年に作曲されました。この時期、ブラームスは聖書のテキストを歌詞に用いた《4つの厳粛な歌》Op.121も作曲しています。《11のコーラル前奏曲集》は遺作ですが、Op.122として1902年に出版されました。《4つの厳粛な歌》と共に、死を予感して作曲された音楽とされています。バッハのコーラル前奏曲《汝の御座の前にわれ進み出て》BWV668が、死ぬ直前に作曲されたという逸話が語りつがれていたことから（事実そうではないことが後に判明）、ブラームスは最後に、バッハに倣ってコーラル前奏曲を作曲して死にたいと思ったのかもしれませんが。真実はもはやわかりませんが、睥睨がんに侵されていたブラームスが、死を意識して作曲していたことは、そのコーラルの選定からも明らかです。

今回は土樋のオルガンの響きを考慮して9曲の作品を選択しました。第1曲《わがイエス、われを導きたまえ》は最も大規模な作品で、バロック時代のJ.バッヘルベルの作風を彷彿とさせます。コーラルの旋律は、間奏が挿入されながら現れます。



《おお愛する魂よ、汝を飾れ》は3声部の作品で、バッハを意識したのでしょうか。コーラル第1分節のメロディーの音型が作品全体で使われています。ブラームスは《わが心の切なる願い》のメロディーを基に2つの作品を作曲しました。第1曲目は『オルガン小曲集』を念頭に、間奏はなくコーラル旋律はソプラノ声部に置かれ、装飾されて演奏されます。第2曲目はコーラル旋律には装飾が施されず足鍵盤で、テノール声部として演奏されます。手鍵盤の16分音符は、モノトーンの雰囲気醸し出し、ブラームスのピアノ作品を思い起こします。（椎名 雄一郎）

— 建築が語る東北学院の歴史 (11) —

土樋キャンパスの礼拝堂に繰り返し用いられる装飾に、上部が楕円形に象られた外壁の付け柱と、その内側に施された頂部円形の図象があります（図1）。特に後者は単独の壁面装飾としても多用されており、外壁の窓下（図1）や南側バルコニー席の出入口上部（図2）、やや変形されて講堂最前列の手摺（図3）に確認することができます。バルコニーの手摺（図4）もその派生と言えます。

これらはいずれも、中世のゴシック様式に由来する造形を抽象化したものと考えられます。図5はパリ大聖堂の壁面（高窓・飛び梁）をトリミングしたのですが、礼拝堂とよく似た図象が見られます。円は天の普遍性や事物の根源・存続・終曲を象徴し、神の慈愛をも示すと言われます。また下部の四角が弧を介して円へと繋がるゴシック的な図象は、地上と天上、不完全と完全の間をつなぐダイナミックなイメージとして解釈されます（CHAS, 1966）。近代芸術的な幾何学形態（正円、円弧、長方形、正三角形）の組み合わせにより、宗教的な象徴性が表現されています。（工学部 崎山 俊雄）



図1：礼拝堂玄関上部の壁面装飾

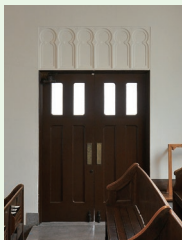


図2：南側バルコニー席出入口



図3：講堂最前列手摺



図4：東側バルコニー席手摺



図5：パリ大聖堂の壁面詳細（『世界美術大全集』第9巻（小学館、1995）掲載写真を一部トリミング）

東北学院の草創期 (17) 「最初の学生」

— 終わりに一枚の写真から —

紹介してきた創立当初の学生7名が一堂に会している写真を見つけました。押川の実兄橋本経光ら当時の在学生15人と、ホーイ、吉田、菅田など仙台神学校の関係者5人が前列中央の髭の老人を迎えた記念に撮影したものと推測できます。校長の押川がいないことから、撮影時期は押川が外遊中（1889（明治22）年3月～翌年5月）とも考えられます。

仙台神学校は1888年12月に日本基督一致教会の神学教育機関として位置づけられました。この時期は一致教会（押川等）と組合教会（新島等）との教派合同に関する話し合いが続けられており、1889年3月の「合併委員会」は、「全会一致一名の不同意者なく誠にめでたき会議なりし（『基督教新聞』第296号）」と報告されています。この会議には一致教会を代表して長老格の奥野昌綱も出席していますが、上の「髭の老人」と酷似しており、奥野がこの会議の成果報告を兼ねて加盟したばかりの仙台神学校を訪問したと想像すると、この写真は特別の意味を持っています。

地域や教派をさえ越えて日本国中を駆け回った草創期の学生たちから、未熟ながらも自分の志に従って生きようとした明治の若者のエネルギーを感じます。
（東北学院史資料センター客員研究員 日野 哲）



美術による賛美 (13) 三校祖の肖像画



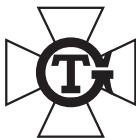
シュネーダー像

ホーイ像

押川方義像



1933年作の三校祖の肖像画を描いた布施信太郎（1899-1965）は、東北学院で英語と洋画を教授した布施淡（ふせあわし 1873-1901）の息子。布施淡は、相馬黒光（そうまこっこう 旧姓は星、本名は良 1876-1955）の日曜学校での憧れの人でした。息子の信太郎も画家となり、印象派の影響を受けた即興的で大胆な黒田清輝一派を嫌って、伝統的な油彩の技術を継承する保守的な太平洋画会に属して、満谷国四郎（1874-1936）らと同じく平面的色付けで日本の油絵をめざしました。南洋諸島にも滞在し画題にも、また戦争画も描いています。戦後は太平洋画会を支えました。三校祖の肖像画にはそれぞれローマ字で署名と昭和8年との年記が記されていて、抑えた色彩で、敬愛する三校祖の肖像画にふさわしいモニュメンタルで落ち着いた油絵になっています。それぞれ115.5×89cm。 （理事長特別補佐（宗教センター担当） 鐸木道剛）



いのち

ひかり

あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE (いのち・ひかり・あい)

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第19号

2022年7月7日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋 1-3-1
発行責任者：宗教センター主任 原田 浩司
東北学院宗教センター TEL：022-264-6558
Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp